
ソーシャリー・エンゲイジド・アートの限界——Suzanne Lacy による《The Oakland Projects》の再検討

富田葉 (京都大学)

ソーシャリー・エンゲイジド・アート (Socially Engaged Art, SEA) とは社会的な問題の現実社会における改善を志向する芸術活動であり、多様な人々との協働、一定期間の継続、成果物よりも制作過程における変化の重視などの特徴を持つ。1960 年前後から登場した芸術と社会の区別を曖昧にする実践を直接的な源流とし、1990 年頃からはアートワールドからの注目や行政などの支援を受け、ますますその実践数を増やしてきた。しかしそれと同時に、協働の理想と反して作家が強い権力を握ることや、芸術の道具化による新自由主義への加担など、構造的な問題も指摘されてきた。スザンヌ・レイシー (Suzanne Lacy, 1945-) はこうした SEA の先駆者として知られる作家である。1970 年代に身体性やフェミニズムに根ざしたパフォーマンスからキャリアを開始し、1980 年代以降の作品や理論的な提唱は初期 SEA における重要な実践として現在でも参照されている。

本発表では彼女の代表作である《The Oakland Projects》(1991–2001) の分析を行う。米国カリフォルニア州オークランドで制作された本作品は、若者の犯罪率の高さが危惧されていた当時、メディアの偏った報道により若者に結びつけられた暴力的なイメージの解消を目指していた。多様な関係者との協力に基づき、教育プログラム、パフォーマンス、行政との連携などを含んで十年間継続した結果、プロジェクトは若者向け政策への予算獲得や関係者への教育効果などの社会的な成功を収めた。同時に、リアルタイムの会話を観客に提示する構造や形式面の工夫は美的な成功として評価され、作品の特徴と成果の両面から SEA の初期事例として肯定的に受容されてきた。

しかしこうした成功の裏には、多くの先行研究で等閑視されてきたレイシーという作家の強権性が隠されている。すなわち自身の美的意図を優先する傾向が、参加者の意図の軽視や新自由主義の問題への接近など、作品と SEA の理念に反する不平等の促進に繋がっていたのだ。彼女は自身の作品への介入を「芸術作品として成立させるため」と正当化するが、作品が社会問題に関与し、現実の多様な人々へ実際に影響を与えていることに鑑みれば、「芸術」であるという弁解は不平等に対する批判を免れる理由にはならない。そこで本発表では当該作品を SEA の限界を示すものとして再検討することを目指す。この発表はレイシー作品に対する従来の肯定的な評価に対して批判的な視座を導入する試みである点で、また、芸術の制度的利用が増加する今日、SEA の限界を実践に即して検証する足掛かりとなる点で一定の意義を認められるだろう。